

笹川保健財団 研究助成

助成番号：2021A-101 城戸麻衣子

(西暦) 2022年3月7日

公益財団法人 笹川保健財団

会長 喜多悦子 殿

2021年度笹川保健財団研究助成
研究報告書

標記について、下記の通り研究報告書を添付し提出いたします。

記

研究課題

遷延するコロナパンデミックとポストコロナ社会における在宅看護センターの在り方に関する研究

所属機関・職名 一般社団法人 ライフナビゲート 管理者

氏名 城戸 麻衣子

1. 研究の目的

新型コロナウイルス蔓延にともない、各地での在宅医療・看護の重要性が改めて認識されるとともに、利用者のみならずスタッフの安全をも保障しつつ、質の良い在宅看護を継続・発展させる難しさも実感されている。本研究では、国内感染の確認から2年を経過し当面継続すると考えられる新型コロナ時代と、その後のポストコロナ社会における在宅看護の質の保証と継続性を高め、在宅看護力の強化を図るため、コロナ禍に訪問看護の現場で起きたこと、訪問看護の管理者が考えたことを明らかにすることを目的とする。

これまで主に個人の居宅での平時の個の療養生活のなかでとらえられてきた在宅看護が、感染症の拡大という想定外の事態への対処を求められてきた。地域完結型の保健医療システムの構築が進められるなかで、地域包括ケアシステムの脆弱性が明らかになったこの機会を逃さず、コロナ禍の訪問看護の実相を訪問看護ステーションの管理者自らの手で明らかにすることで、ポストコロナ社会における在宅看護のあり方を考え、実現するために必要な知見を得ることに貢献することができる。

2. 研究の内容・実施経過

(1) コロナ研究班の設置・運営

コロナ禍での活動制限のもと、Web会議システムZOOMを用いて研究班を開催した。会議のなかでは、訪問看護実践に携わるものとしてのこのコロナ禍をどのように受け止めているか。どのようなところに影響が出ているかなど、それぞれが今回の研究危機状況について意見交換をしながら、調査で取り上げるべき論点の整理を行った。また、研究会後の情報交換、及び研究会でのコミュニケーションを補完するためビジネス上のコミュニケーションツールとして用いられているChatworkを用いた。

[研究会の開催状況]

- ① 第1回(6月):研究班の顔合わせを兼ねて、コロナ禍での訪問看護ステーションの活動について研究を実施している研究者(畑吉節未:岐阜保健大学大学院教授)から既往研究について報告、及び、調査票の作成において重視すべき点など研究の進め方について助言をいただいた。なお、畑吉節未氏は笹川保健財団指定研究「Health Emergencyにおける在宅看護支援の在り方に関する研究」の研究代表者である。
- ② 第2回(9月):予め研究班のメンバーから調査項目についての提案を求め、それらをカテゴリー化したものをもとに意見交換を行った。訪問看護ステーションの管理者で構成する研究班のためにどうしてもメンバーの関心が管理者としての視点が重視されがちで偏りが見られたので、改めて基本に戻って検討を行うこととした。療養者の視点や、訪問看護ステーションと協働すべき多職種や行政との連携などが課題としてあげられた。そうした課題に対応するためチャットワークでの意見交換などを行いながら検討を重ね、質問の内容を具体化していった。また、Google formを

活用したプロトタイプを作成し、研究班のメンバーからの意見聴取を行いながら検討を進めた。詳細は「調査票の設計」

- ③ 第3回（1月）：調査目的の確認をしながら調査票の構成について意見交換を行った。この頃、第6波の感染拡大に伴い、在宅看護の現場でも感染者を新規利用者として受け入れる事態が発生しているとの報告がなされ、そうした実態についても調査を行うため調査項目の修正を図った。また、この調査の実施に向けて笹川保健財団研究倫理審査委員会への審査申請の必要性について確認を行った。

（2）調査票の設計・運用のための Web フォームの作成

研究班での会議及びネットを介した意見交換を続けるなかで、今後のケアの在り方を考えるためには、コロナ禍での在宅ケア環境への影響をとらえた上で、訪問看護を提供するための療養者との関係性、多職種協働等についての影響をとらえることが不可欠であると考えた。ただ、こうした柱立てを具体的な質問肢として作成することは難しく、はじめは「開かれた質問」を Google form を用いて展開し、メンバーが実際に記入してその記入内容をもとに、選択肢を作成するという作業を繰り返して行った。回答を依頼する訪問看護ステーションの管理者もコロナ禍での訪問看護の経験は十分とは言えず、開かれた質問だけでは具体的な回答を得ることが難しくなるため、この作業に重点を置いて作業を行った。その際、感染拡大の第3波までを対象に調査を実施していた畑吉節未先生らが用いた調査票も、ご了解をいただき参考にさせていただいた。

作業を進めるなかで、明らかにすべき5つのポイントを整理した。第1に、コロナ禍の応じた感染症対策/利用者の生活持続のためのサービスの在り方を構想すること大切さである。第2に、在宅における感染症対策では単に自宅だけでなく様々な場と接点を持つ「地域」にあることを意識する必要性である。第3に、整備が進む地域包括ケアシステムのもとでの感染症対応、訪問看護の継続が求められることに配慮する必要性である。第4に、生活と医療の両側面から療養者を支援する看護職が果たすべき役割を探究する必要性である。その上で、訪問看護を担うスタッフの安全、ストレスへの対応など在宅看護を持続させるために取るべき行動をとらえる必要性である。

このような検討の結果、第一部：コロナ禍の訪問看護師、訪問看護ステーションの行動、第二部：訪問看護ステーションの活動を継続させるための管理行動、第三部：訪問看護ステーションの管理者としての自己評価の3つの柱立ての調査項目を作成した。詳細は表の通りである。なお、実施に当たって対象者の負担を考え、設問数を考慮して3つの柱立てを4つに分割し、Google form 上で作成した。

（3）調査対象

笹川保健財団が実施した在宅看護センター起業家研修を修了し現時点で在宅訪問看護ステーションを運営している管理者を研究協力者（候補）とした。本研究はコロ

ナ禍における訪問看護事業の実践経験を収集しその結果に基づいてポストコロナ社会の在宅看護像を構想することを目的としており、多角的視点から観察と考察を行う能力を持つ人々の見解を収集することが不可欠である。上記の研修において第一線で活躍する多方面の専門家・研究者から行政社会力、看護実践力、事業運営力、保健連携力などを学んだ人々なら協力者として最適であると考えた調査対象は笹川保健財団が実施した起業家育成プログラム修了者 [109名] のうち訪問看護ステーションを運営する管理者である。

【本研究は 2021 年実践研究として企画し年度内に調査を終える予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の第 5、6 波という流行の消長に応じ、調査内容を 3 段階に構築し直した。これらの調査は、第 6 波が進行中であり、なおその流行にも変容が危惧されることで、調査票は配布されているが、回答を得ることを延期した。今回は、高度に遂行した調査票迄を報告し、以後、流行が収まった段階で、調査分析を追加報告させて頂きたい。】

調査票の質問項目数（質問項目・回答式別）

区分	質問項目	設問数	選択回答方式	自由回答形式
第1部-1	●今回の感染症の拡大にどのように備えたか	9	8	1
	●感染症対策をどのように行い、在宅看護実践を進めたのか	8	8	0
	●具体的な訪問看護活動	6	4	2
	●利用者に生じた影響	4	3	1
	●利用者に生じた影響を踏まえながら行った訪問看護活動	4	4	0
	●ケアを提供する上での利用者との関係性〔療養者－看護師関係〕に生じた影響と対応	6	5	1
	●ターミナル期と看取りのケアへの影響	10	9	1
	小計	47	41	6
第1部-2	●多職種との協働	3	3	0
	●他の訪問看護ステーションとの協働	4	2	2
	●介護事業者及び他の医療専門職との連携	5	3	2
	●病院との連携	3	2	1
	●保健所、自治体との連携	8	7	1
	●多職種との協働に必要なこと、参考になる実践例	2	0	2
	●感染者・濃厚接触者が発生した場合の対処	6	4	2
	小計	31	21	10
第2部	●感染症拡大が繰り返し訪れるなかでの経営活動	13	10	3
	●スタッフが感染または濃厚接触者になった場合の対応	9	8	1
	●経営活動を継続するために必要な「もの」	3	2	1
	●経営活動を継続するために必要な「お金」	8	7	1
	●経営活動を継続するために必要な「情報」	2	2	0
	●経営活動を継続するなかで要請された感染者の受け入れへの対応	3	2	1
	小計	38	31	7
第3部	●コロナ禍で提供した在宅看護サービスの質の評価	3	1	2
	●コロナ禍での経験を通して学んだこと、今後の取組のモデルとなる看護実践	4	1	3
	●管理者として業務上のストレスへの対処	4	2	2
	●管理者として迷ったり、困ったりしたこと	3	1	2
	●管理者としての意識と行動の変化	4	2	2
	●これからの在宅看護センターのあり方	4	0	4
	小計	22	7	15
合計		138	100	38